

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：12701

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24653192

研究課題名(和文) 大学生における人間的成長の測定に関する研究

研究課題名(英文) Measurement of university students' personal growth

## 研究代表者

堀井 俊章 (Horii, Toshiaki)

横浜国立大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：70306083

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は大学生における人間的成長を測定する尺度を開発し、大学生の人間的成長について心理学的に検討することである。主な成果は次の通りである。第1に、大学生の人間的成長を測定する尺度(30項目)が開発された。第2に、大学生の人間的成長を測定する尺度は心理尺度として一定水準以上の信頼性と妥当性を持つことが確認された。第3に、大学生の人間的成長を促進する6要因が発見された。第4に、大学生の人間的成長を促進するためのガイドラインが作成された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to investigate university students' personal growth, and develop a reliable and valid measurement instrument. The main results were: (1) A 30-item scale was developed to measure university students' personal growth. (2) The scale's reliability and validity were sufficiently high. (3) Six factors which promote university students' personal growth were identified. (4) Recommendations for guidelines to promote university students' personal growth were suggested.

研究分野：教育臨床心理学

キーワード：人間的成長 尺度開発 大学生 学生相談

### 1. 研究開始当初の背景

平成 12 年 6 月、当時の文部省から「大学における学生生活の充実方策について（報告）—学生の立場に立った大学づくりを目指して」（文部省高等教育局，2000）が打ち出され、その中に「学生相談は、全ての学生を対象として、学生の様々な悩みに応えることにより、その人間的な成長を図るものである」と明記された。

人間的成長という概念は、学術的には決して目新しいものではなく、人間性心理学をはじめ、さまざまな学派から理論的説明がなされてきた。従来、事例研究においても、大学生の人間的成長に言及した著書・論文は枚挙に暇がなく、人間的成長は学生個人の固有の成長という視点から個別事例的に記述される傾向にあった。その一方で大学生の一般的な人間的成長に関する数量的実証的研究はかなり遅れをとっている。その一因は大学生の一般的な人間的成長を客観的に測定する有用なツールが存在しないことにあると考えられる。大学生の人間的成長というテーマに数量的実証的にアプローチするためには、大学生の人間的成長にはある一定の共通する内容が認められることを確認した上で人間的成長を測定する心理尺度を開発する必要がある。

### 2. 研究の目的

次の 3 点を目的とする。

- (1) 大学生の人間的成長を測定する心理尺度を開発する。
- (2) 尺度の信頼性と妥当性を検討する。
- (3) 尺度を利用し、大学生の人間的成長を規定する要因を検討する。その結果を踏まえ、大学生の人間的成長を促進するためのガイドラインを作成する。

### 3. 研究の方法

(1) 一般大学生を対象に質問紙法による集団調査を実施した。調査時には調査協力者に本研究の趣旨を口頭および文書で十分に説明し、賛同する者のみを対象とした。

(2) 収集されたデータについて、自由記述によるデータには質的記述的分析を施し、量的データには統計処理を施した。

### 4. 研究成果

(1) 人間的成長を測定する尺度の開発

成長内容の収集と分類

首都圏および近郊の大学生 1,224 人を対象に質問紙法による調査を実施した。調査対象者には大学入学後において人間的に成長したと感じる事柄（成長内容）について記入を求めた（複数回答可）。

成長内容について記入された総数は 2,046 個であり、一人平均 1.67 個であった。データ分析の結果、6 領域が生成された。領域名と個数を表 1 に示した。それを見てわかるように、大学生の人間的成長は一定のまとまりを

もってとらえられることが示唆された。

表 1 大学生における人間的成長の内容

領域	個数
生活に関する領域	722
対人関係に関する領域	475
思考に関する領域	242
精神的健康に関する領域	215
他者尊重に関する領域	215
忍耐に関する領域	177

#### 尺度項目の構成

上記の領域をもとに 100 項目から成る予備尺度（7 件法）を構成し、大学生 560 人を対象に尺度を実施した。

不良項目の確認後、因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った結果、6 因子が抽出された。

第 1 因子は、対人関係を構築、拡大し、良好な関係性を形成する力を表すため「対人関係形成力」と命名された。第 2 因子は、神経過敏ではなく、前向きに物事を考え、余裕を持てる力を表すため「精神的健康力」と命名された。第 3 因子は、他者に共感し、友達や親を尊重する力を表すため「他者尊重力」と命名された。第 4 因子は、嫌いなことや嫌いな相手でも我慢する力を表すため「忍耐力」と命名された。第 5 因子は、物事を論理的に深く幅広く考える力を表すため「思考力」と命名された。第 6 因子は約束を守り、時間や金銭を管理する力を表すため「生活力」と命名された。

尺度の有用性を考慮し、各因子の負荷量 40 以上の上位 5 項目を抽出し下位尺度を構成した（6 下位尺度全 30 項目）。

#### (2) 尺度の信頼性と妥当性

##### 信頼性

本尺度の内的整合性を検討するために Cronbach の係数を算出し、また、安定性を検討するために再検査信頼性係数（間隔 4 週間）を算出した。表 2 より、両値とも適切であり、本尺度の信頼性が確認された。

表 2 本尺度の内的整合性と安定性

尺度名	(n=560)	(n=37)
対人関係形成力	.87	.81
精神的健康力	.81	.76
他者尊重力	.83	.80
忍耐力	.76	.79
思考力	.76	.74
生活力	.72	.90

##### 妥当性

本尺度の妥当性を検討するために、本尺度と、関連が予想される他の尺度との関連を分析した。

#### 1) 心理的 well-being との関連

本尺度と心理的 well-being 尺度（西田，

2000)との相関係数を表3に示した。

表3 本尺度と心理的well-being尺度との相関(n=290)

	対人関係形成力	精神的健康力	他者尊重力	忍耐力	思考力	生活力
人格的成長	.32 ***	.31 ***	.45 ***	.22 ***	.44 ***	.17 **
人生における目的	.29 ***	.26 ***	.25 ***	.13 *	.29 ***	.26 ***
自律性	.20 **	.26 ***	.15 *	.04	.35 ***	.22 ***
自己受容	.36 ***	.56 ***	.32 ***	.25 ***	.32 ***	.29 ***
環境制御力	.60 ***	.57 ***	.55 ***	.51 ***	.57 ***	.37 ***
積極的な他者関係	.54 ***	.43 ***	.61 ***	.37 ***	.33 ***	.22 ***

\*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

## 2) 成長不安・抑制不安との関連

本尺度と成長不安・抑制不安を測定する尺度(山本, 1992)との相関係数を表4に示した。

表4 本尺度と成長不安・抑制不安を測定する尺度との相関(n=290)

	対人関係形成力	精神的健康力	他者尊重力	忍耐力	思考力	生活力
成長不安	.19 **	.07	.31 ***	.10	.37 ***	.18 **
抑制不安	-.37 ***	-.54 ***	-.30 ***	-.26 ***	-.31 ***	-.23 ***

\*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$

## 3) 自尊感情との関連

本尺度とRosenbergによる自尊感情尺度(山本他, 1982)との相関係数を表5に示した。

表5 本尺度と自尊感情尺度との相関(n=198)

	対人関係形成力	精神的健康力	他者尊重力	忍耐力	思考力	生活力
自尊感情	.39 ***	.61 ***	.26 ***	.16 *	.35 ***	.26 ***

\*\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$

## 4) 同一性との関連

本尺度とRasmussenの自我同一性尺度(宮下, 1995)の同一性対同一性拡散との相関係数を表6に示した。

表6 本尺度と同一性尺度との相関(n=198)

	対人関係形成力	精神的健康力	他者尊重力	忍耐力	思考力	生活力
同一性	.38 ***	.48 ***	.30 ***	.18 *	.35 ***	.26 ***

\*\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$

## 5) 達成動機との関連

本尺度と達成動機測定尺度(堀野, 1991)の相関係数を算出した結果を表7に示した。

表7 本尺度と達成動機尺度との相関(n=198)

	対人関係形成力	精神的健康力	他者尊重力	忍耐力	思考力	生活力
自己充実的	.36 ***	.33 ***	.54 ***	.31 ***	.46 ***	.35 ***
競争的	.23 **	.21 **	.20 **	.23 **	.33 ***	.24 **

\*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$

自己充実的 = 自己充実的達成動機、競争的 = 競争的達成動機

## 6) 向上心との関連

本尺度と向上心尺度(井上, 1999)との相関係数を算出した結果を表8に示した。

表8 本尺度と向上心尺度との相関(n=198)

	対人関係形成力	精神的健康力	他者尊重力	忍耐力	思考力	生活力
向上心	.34 ***	.34 ***	.49 ***	.23 **	.46 ***	.43 ***

\*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$

## 7) 精神的不健康度との関連 1

本尺度と日本版GHQ精神健康調査票(中川・大坊, 1985)との相関係数を表9に示した。

表9 本尺度と日本版GHQ精神健康調査票との相関(n=170)

	対人関係形成力	精神的健康力	他者尊重力	忍耐力	思考力	生活力
身体的症状	.01	-.24 **	-.03	-.15	.04	-.10
不安と不眠	-.07	-.36 ***	-.02	-.06	-.03	.01
社会的活動障害	-.28 ***	-.45 ***	-.25 **	-.21 **	-.26 ***	-.26 **
うつ傾向	-.26 **	-.46 ***	-.11	-.07	-.09	-.15 *

\*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

### 8) 精神的不健康度との関連 2

本尺度と全国大学保健管理協会によるUPI 学生精神的健康調査(松原, 1995)との相関係数を表 10 に示した。

表 10 本尺度とUPI との相関 (n=206)

	対人 関係 形成 力	精神 的健 康力	他者 尊重 力	忍耐 力	思考 力	生活 力
U P I	-.22 **	-.44 ***	-.17 *	-.14 *	-.13	-.22 **

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

### 9) 大学生活との関連

本尺度と大学生活チェックカタログ(福盛他, 2001)との相関係数を表 11 に示した。

表 11 本尺度と大学生活チェックカタログとの相関 (n=221)

	対人 関係 形成 力	精神 的健 康力	他者 尊重 力	忍耐 力	思考 力	生活 力
自己 不確 実感/ 不安	-.28 ***	-.55 ***	-.15 *	-.13 *	-.24 ***	-.21 **
社会 的関 係	.46 ***	.26 ***	.39 ***	.24 ***	.06	.03
現在 のい きが い/ 充実	.31 ***	.36 ***	.33 ***	.19 **	.12	.30 ***
自己 肯定 感	.44 ***	.50 ***	.45 ***	.38 ***	.38 ***	.32 ***
将来 への 展望	.29 ***	.32 ***	.24 ***	.21 **	.33 ***	.31 ***
大学 内学 習	.11	.00	.11	.05	.02	.12
積極 性	.63 ***	.37 ***	.34 ***	.15 *	.28 ***	.17*
大学 全体 への 満足 感	.28 ***	.28 ***	.31 ***	.20 **	.01	.20 **
睡眠/ 食欲/ 体調	.20 **	.38 ***	.16 *	.27 ***	.16 *	.36 ***
仲間 との 活動	.46 ***	.25 ***	.33 ***	.26 ***	.10	.07
無気 力	-.34 ***	-.40 ***	-.25 ***	-.30 ***	-.32 ***	-.53 ***
大学 外学 習	.07	.11	.08	.10	.00	.07

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

以上のように、本尺度は関連尺度と概ね予測通りに有意な関連性を示し、本尺度の妥当性を裏付ける結果が得られた。

### (3) 人間的成長の規定要因

人間的成長を規定する要因を検討するための予備研究として、大学生を対象に人間的成長が促進された理由・原因をリサーチし、その結果をもとに要因尺度を作成した。

大学生 408 人を対象に本尺度と要因尺度を実施し、要因尺度について因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った結果、「理解者との出会い」「未来展望の獲得」「親からの分離」「コミュニケーションの経験」「専門的学習の経験」「ゆとりの実感」の 6 因子が抽出された。

6 因子に基づき下位尺度が構成され、要因尺度は高い信頼性を備えていることが確認された。

要因尺度と本尺度(「対人関係形成力」「精神的健康力」「他者尊重力」「忍耐力」「思考力」「生活力」)の両者の関係性を検討するために、共分散構造分析によるパス解析を行った。主な結果は以下の通りである。

- 1) 「理解者との出会い」は「対人関係形成力」「他者尊重力」「忍耐力」に有意な正の影響を与えた。
- 2) 「未来展望の獲得」は「対人関係形成力」「精神的健康力」「思考力」「生活力」に有意な正の影響を与えた。
- 3) 「親からの分離」は「他者尊重力」に有意な正の影響を与えた。
- 4) 「コミュニケーションの経験」は「対人関係形成力」「精神的健康力」「他者尊重力」「忍耐力」「思考力」「生活力」に有意な正の影響を与えた。
- 5) 「専門的学習の経験」は「生活力」に有意な正の影響を与えた。
- 6) 「ゆとりの実感」は「対人関係形成力」「精神的健康力」「他者尊重力」「忍耐力」「思考力」「生活力」に有意な正の影響を与えた。

なお、適合度指標は十分な値を示し、モデルの適合性は高いと判断された。

### (4) ガイドライン

大学生の人間的成長を図るために大学はどうあるべきか。今後の大学像および大学教育のあり方について主に以下の 5 点を提言する。

#### コミュニケーション機会の提供

「コミュニケーションの経験」は人間的成長全般に有意な正の影響を与えた。大学生の人間的成長を促進するためには、授業内でコミュニケーション機会(討論、発表、質疑応答など)を積極的に設けることが効果的である。但し、現代大学生はコミュニケーションに自信を持たない者が少なくないと言われている。そのような大学生を対象にコミュニケーション力を向上させるためのセミナーやグループワークを定期的開催し、大学生がコミュニケーション機会を与えられたときに円滑に受け入れやすくなるよう支援することが重要である。

## ゆとりの尊重

「ゆとりの実感」は人間的成長全般に有意な正の影響を与えた。プレッシャーから解放され、自由な時間を持つことも人間的成長を促進することになる。常に何かに急ぎ立てられ、強迫的な前進が求められる状況下では成長が阻害されるおそれがある。ゆったりとした環境で、これまでに蓄積されてきた疲労を回復し、未来に向けたエネルギーを十分に取り入れること、また、静かで落ち着いた環境で、自分をじっくり見つめなおすことも大学生の成長には欠かせない。現代の大学において大学生の自由やゆとりを尊重する姿勢は失いかけているように思われるが、今一度再考が求められよう。

## キャリア教育の推進

「未来展望の獲得」は「対人関係形成力」「精神的健康力」「思考力」「生活力」を促進する。近年、明確な目標もなく、単に大学に入学することだけを目指してきた大学生が目立っており、これらの者にとっては未来展望を獲得することが課題となる。自分の人生を見つめなおし、生きがいを発見し、未来に展望を持てるようなキャリア教育などを推進することが必要であろう。

## ピア・サポート制度の普及

「理解者との出会い」は「対人関係形成力」「他者尊重力」「忍耐力」を高める。このためには様々な方法が考えられるが、例えば、大学生同士がお互いに理解し支え合うピア・サポート制度を普及させることが望まれる。但し、すべてを大学生任せにするのではなく、専門家が中心になってこの制度を支える仕組みを十分に整え、細心の注意を払いながら運用する必要がある。

## 専任カウンセラーの十分な人数の配置

「理解者との出会い」という点については、カウンセラーによる支援も欠かせない。大学生にとって自分という存在が他者から受容され、認められ、理解されることは、成長を促す上で重要である。大学生一人一人を深く理解するための専門的訓練を受けてきた学生相談の専門家、すなわち専任カウンセラーを配置することは、大学生の成長を促すためにきわめて効果的である。

また、人間的成長を促進する諸要因を高めるためにカウンセラーが中心となって実効性の高い教育プログラム(人間開発プログラム)を大学の課外活動だけでなく正課活動にも取り入れ、継続的に実践することが求められる。専任カウンセラーが個人カウンセリングだけでなく、教育プログラムの実践という役割を担うことも考えると、専任カウンセラーは大学規模に応じた十分な人数の配置が求められる。

## <引用文献>

福盛英明・峰松修・馬場園明・一宮厚・永野純・藤野武彦・上園慶子 大学生のQOLの研:大学生用QOL質問票「大学生生活

チェックカタログ」の開発. *CAMPUS HEALTH*, 37(2), 55-60, 2001.

堀井俊章 大学生不登校傾向尺度の開発. *学生相談研究*, 33, 246-258, 2013.

堀野緑 成功恐怖の再検討. *実験社会心理学研究*, 31, 61-68, 1991.

井上光一 自己受容における向上心とあきらめ. *京都大学大学院教育学研究科紀要*, 45, 406-418, 1999.

松原達哉 最新心理テスト法入門 基礎知識と技法習得のために. 日本文化科学社. 1995.

宮下一博 Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討. *教育心理学研究*, 35, 253-258, 1987.

中川泰彬・大坊郁夫 日本版 GHQ 精神健康調査票手引き. 日本文化科学社. 1985.

西田裕紀子 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究. *教育心理学研究*, 48, 433-443, 2000.

山本真理子・松井豊・山成由紀子. 認知された自己の諸側面. *教育心理学研究*, 30, 64-68, 1982.

山本誠一 青年期における不安の二側面に関する実証的検討. *心理学研究*, 63, 8-15, 1992.

## 5. 主な発表論文等

[学会発表](計3件)

堀井俊章、大学生の人間の成長を測定する尺度の開発 メンタルヘルスと人間の成長との関係、日本カウンセリング学会第47回大会、2014年8月、名古屋大学(愛知県)

堀井俊章、大学生の人間の成長 成長内容の分析、日本学校メンタルヘルス学会第17回大会、2014年1月、帝京大学(東京都)

堀井俊章、大学生における人間の成長の測定 因子構造の検討、日本カウンセリング学会第46回大会、2013年9月、東京電機大学(埼玉県)

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀井 俊章 (HORII, Toshiaki)

横浜国立大学・教育人間科学部・教授

研究者番号: 70306083

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし